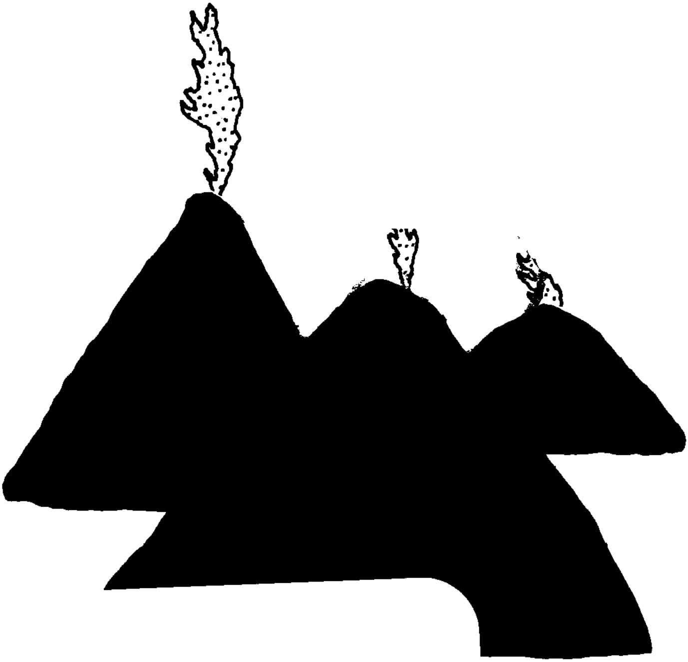
いつも雑踏の中にいた

勝目 梓

踏の中にいた

勝目 梓



いつも雑踏の中にいた
定価八〇〇円
昭和五十六年九月二十日　第一刷発行
著者　勝目梓
発行者　大沼淳
発行所　文化出版局
東京都渋谷区代々木三の二二の一
郵便番号　一五一
電話（〇三）三七〇－三一一一（代表）
振替　東京二－一九五六七〇番
印刷所　カバー・表紙　文化カラー印刷
本文　共同印刷
製本所　明泉堂
0095-710680-7368 ©Azusa Katsume 1981 Printed in Japan

いつも雑踏の中にいた　目次

時計……7
夜光虫……13
秘儀……19
暴力……25
げざい人……31
ある成人式……37
酒について……43
赤い花……49
悪書……55
図々しい話……61
うさんくさい……67
縁起……73
惚れる……79
愛の証……85
ばか話……91
酒癖……97

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

のめりこむ …… 103
人格について …… 109
学ぶ …… 115
胸が痛む …… 121
たばこ …… 127
悪夢 …… 133
方言 …… 139
アイドル …… 145
猫 …… 151
映画 …… 157
おもしろいこと …… 163
すねる …… 169
カラオケ …… 175
執着 …… 181
あとがき …… 187

装幀・装画／榎本了壱

いつも雑踏の中にいた

時計

手紙読んだよ。

とうとう退学の決意を固めたようだね。あれだけ悩み、考えぬいた末の決断だから、はたからとやかく言うことはなさそうだね。

ぼくも高校二年で学校を中退したんだけど、あのときは格別に悩みも考えもしなかったな。だから決意なんてものもなかった。だらしのない話だけど、なしくずしに、自然解消的に学生であることをやめてしまったわけ。

学校やめて、十七歳で長崎の島の炭坑で働くようになったんだ。

そこからぼくの人生がはじまっている、という意味から言えば、炭坑はぼくの原点みたいなものかもしれない。だからそこには、ぼくの眼に深く残っている原光景とでも呼びたいようなものがいくつもあるんだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

Sという坑夫がいた。ぼくよりも三つか四つ年上だった。陽気で酒好きで、当時、人気の高かった歌手の田端義夫の熱狂的なファンだったな。田端義夫の九州公演なんかがあると、仕事休んでとんでいっちゃうの。それで九州の巡演先をつぎつぎに追っていくわけなんだ。

そのころ、つまり昭和二十五、六年ごろだけど、ようやくいろんな物資が出まわりはじめて、その中で金張りの大きい腕時計がちょっとはやったことがあった。金張りといっても合金かメッキだけどね。珍しかったんだと思うな。

ついでに言うと、サングラスとか、リーゼントなんてヘアスタイルもあのころ、ばかにはやってたね。

髪をポマードとかチックでリーゼントスタイルになでつける。そして、前髪のふくらみと、横の部分の髪がくずれないように、タオルや手拭いで鉢巻きをする。それに、白いフレームにグリーンのガラスの入ったサングラスかなんかかけて歩く。——それがぼくら坑夫のふだんのスタイルだったな。

鉢巻きは別にリーゼントの髪形がくずれないためだけにしめるんじゃないんだ。あれは一種の帽子みたいなものだったのかもしれない。遊んでるときでもぼくらはなぜだかいつも鉢巻きをしめてたな。リーゼントの髪形でなくてもね。

給料日（炭坑のことばで受銭（うけせん）と言っていた）になると、島の外からいろんな商人がやってき

て、独身寮の前なんかに、ちょっとした市が立つんだ。衣類とか靴とか洋品雑貨が主だったけどね。

やっぱりよく売れてたのは衣類だった。それに靴かな。底に厚いゴムを張ったラバソールとか、コンビネーションの靴なんかがはやってた。

で、金張りの時計だけど、これがちょっと値が張ってたんだね。どれくらいしたのかもう忘れてしまったけど。値段のわりにはなんだかインチキくさい時計だった。ぼくも欲しくて、しばらく無駄づかいをやめて金をためて買ったんだ。

買ってから、何かの折に時計の裏蓋(うらぶた)をはずしてみて、なんだか騙(だま)されたような気がしたんだけど。外形は大きいのに、中の機械の部分はばかに小さいわけ。婦人用の機械に大型の文字盤をくっつけたというふうだったから、がっかりしたのを覚えている。どうしてそれががっかりするようなことなのか、今考えると、自分でもよくわからないんだけどね。

その金張りの腕時計を、Sもずっと欲しがってて、彼もしばらく無駄づかいをやめて金を残して、念願の品を手に入れたんだ。

Sが金張りの時計を買ったのは、ぼくより後だったんだ。だから、彼は時計の中の機械が、外からの見かけによらず、ひどく小さいものであることも、知っていた。ぼくが話したんだ。

中の機械が見かけを裏切って小さいなんてことは、Sには問題じゃなかったんだね。そうい

うものであることを承知で、Sは時計を手に入れて、じつに無邪気に得意がってた。文字どおり、片時もはなさずに、大事にしていたな。

　メッキか合金かだから、使っているうちに汗やなんかで、金張りの輝きがくもってくるんだよ。なにしろSときたら、仕事のときも時計をはめていくんだから。坑内の湿気や、汗や、炭(たん)塵(じん)で汚れるよね。

　それをSはひまさえあれば、といった感じで磨きたてるの。都合のいいことに、ぼくらの炭坑ではガス爆発の心配がないこともあって、当時はまだカンテラを使ってたんだ。カンテラには火口を囲むようにして、反射板がついてるんだ。このカンテラや反射板を磨くための研磨剤があった。真鍮(しんちゅう)みがきと呼んでいたけど、その真鍮みがきを使って、Sはしょっちゅう金張りの腕時計を磨きたてていたね。バンドまできれいに、丹念に磨くから、彼の自慢の時計は、いつも新品のように金ピカなわけ。

　そのSは、やがて落盤事故であっけなく死んじまった。

　幅二メートル、長さ八メートル、厚さ三メートル近い岩盤の下敷きになって、Sは死んだわけ。ほぼ即死だったんじゃないかな。

　ぼくはSと同じ切羽(きりは)で仕事をしてたんだけど、受持ってた場所がすこし離れていたから死なずにすんだんだ。

天盤の重圧が去ってから、応急の支柱を入れて、岩盤の下敷きになった者たちの救出作業がはじまったんだ。Sのほかに二人がボタに埋まってたんだ。

三人とも死体で出てきたんだけど、ぼくは岩盤の下から出てきたSの顔を見て、度胆(どぎも)を抜かれたな。頭のどこかが割れていて、顔は血まみれになって、その血に炭塵や小さなボタ屑が粉をふいたようにまぶされていて、ちょっと形容できない色なんだ。でもぼくが度胆を抜かれたのは、そのことじゃなくて、Sの口の端から、時計のバンドが垂れ下がっていたのを見たからなんだ。

死体になったSを、岩盤の下からみんなで引きずり出しているうちに、その口の中から血まみれになった金張り時計がこぼれ落ちたよ。危いと思った一瞬、Sはきっと大事にしていた時計を守るために、腕からはずして咄嗟(とっさ)に口にほうり込んだにちがいないんだ。Sは死んだけど、時計は無事でチクタク時を刻んでた。血を拭うとやっぱり金ピカだった。

もちろんぼくらはその時計を、田端義夫のレコードと一緒にSの棺に入れてやったんだ。時計のネジを一杯に巻いてね。

夜光虫

きのう新宿で、偶然、F子ちゃんに会ったんだ。それできみに手紙を書こうと思い立ったわけです。

F子ちゃんは元気そうだったよ。きみのことも元気でやってるらしい、と伝えておいた。彼女はそれを聞いて笑ってうなずいた。きみとF子ちゃんの同棲生活は、結局一年三カ月で終ったわけだけど、ぼくらの若いときも、初恋の相手とは結ばれにくい、なんてことをよく言い合ってたよ。

ぼくもそうだった。初めての相手とは結局、わけのわからない別れ方をしているんだ。きみも、どうしてF子とうまくいかなくなったのか、よくわからないと言ってたけど。

ぼくは十七歳の夏にはじめて女を知ったんだ。炭坑でだったけどね。相手は選炭場に働いてる女で、Y子という名前だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo